

第二十六 日本の言語

佐藤 寛

第一節 言語の性質及活用

言語に、重音單音の二種あり、重音語とは、數音合して一語をなすものをいひ、單音語とは、一音にして一語を成すものをいふ、譬へば、身をミといひ、血をチといふ類は、一音にして一語を成すものにて、山をや。まといひ、川をか。はといふ類は、二音にして一語を成すものなり、其他幾音をかさねいふも皆此の例にて知るべし、我が國の言は、かく重單交用するがゆゑに、その便いふばかりなく、且、語尾の變化によりて、さまざまに活用^{ハツラ}けども、支那はしからず、一音あれば必^ス一語をなし、一語あれば必^ス一字を成して、語尾の變化などなきからに、文字の數のみ多くなりて、さばかりの功用もなし、但^シ二音を合して一語となすもの、全くなきにはあらず、そは之を約めて、蓋^ニ之を約めて諸となし、即^チ于張書諸紳と記せる類、又何不若くは、奚不を約めて、蓋となし、即^チ蓋各言^ニ爾志^一の類是也、されども、かゝる類は、いと已^レは、希れにして、例となす、然るに、彼の西洋諸國には、我が國の言語のごとく、多くは皆重單交用するを以て、其の便なること支那語に比べたらむには、雪泥の差あるべけれども、又我が國語の奇しく妙

なるに比べたらむには、さらに雲泥の差やあらむ抑、我が國の古言は、五十の音を出
 です、是、天地間純粹正雅の音のみを用ゐて、瀾雜不正の音を厠へざるが故なり、さて、
 かく用ゐる音は少けれども、彼此相連ねて活用する故に、幾千萬の言語を成すとい
 へども、足ざることなく盡ることなし、其の上、一言のうへにも亦活用ありて、たとへ
 ば、言、思の如きは、ハヒフへと轉用してイハム、イヒ、イフ、イへ、オモハム、オモヒ、オモフ、
 オモへ、と活らき、往、還の如きは、往はカキクケ、還はラリルレ、と轉用して、ユカム、ユキ、
 ユク、ユケ、カヘラム、カヘリ、カヘル、カへらと活らく、諸の言皆此の格にて、第一の音ア
 カサタナハマヤラワは、いまだ然らざるに用ひ、第二の音イキシチニヒミイリキは、
 方に然るを下へ云ひおくるに用ゐ、第三の音ウクスツヌフムユルウは、方に然るを
 云ひさだむるに用ゐ、第四の音エケセテネヘメエレエは、然せよと令するに用ゐれ
 ども、上にコソの辭あるときは、第三の音と同意になり、下には、ど、ども、などいふ辭あ
 るときは、また已然になるなり、只第五の音オコソトノホモヨロロのみは、かくの如
 くなる例なし、又上件の外にも種々の活用ありて、千言萬語各その例格たがふこと
 なし、又言をつらねて語をなすに、ハモゾコソテニヲヤカム等の辭ありて、其意を分

つ、凡てかく活用助辭に依りて、その義は細に分かる、ものなり、五十音の事は、古史
 活用助辭の事は、詞の玉緒又八衢堀秀成氏が語格全圖といふもの、末に、活用助辭
 等につばらかなければ、今は贅はす、堀秀成氏が語格全圖といふもの、末に、活用助辭
 の數を記して、

此圖ニ所載三十二言ニ百八辭兩段ニ出ル同辭係リテ、三千四百五十六言トナル、
 又四段ノ活、六言ヨリ變格有ノ詞ニ轉テ六百四十八言加ハル、又三十二言ヨリ下
 二段ノ活、須音流音二行ニ轉テ六千九百十二言加ハル、又志支久活ヨリ變格有ノ
 詞ニ轉テ二百十六言加ハル、

總計一萬一千二百三十二言トナル、

と見えたり、語格全圖は略して載せず、若しうたがは、さてこは、たゞ書貸勝、飼咀刈以上
 の四段着、似、于、見、射、居以上一起、落、生、恨、老、下以上二明、淺、當、寐、經、理、肖、荒、植、得以上下
 活來爲、去、有以上變格の三十二言を上にいへりし活用の格に合はせて活用かしたるも
 のにて、其の本はわつかに三十二言のみ、然るに、その活用によりて一萬餘言にもな
 るは、げに奇しく、妙にして、單音語のみなる支那は、さらなり、重音語にして、語尾の變
 化さへある西洋諸國といへども、これには及ばざるべし、故に我が國の言靈のさきは

ふ國、ことだまのたすくる國とはいひつたへたるにこそ、

第二節 言語正變の原因、及び末松謙澄氏の歐文沿革考の内英吉利の部

言語に正變あるは、聲音に正變あるにより、聲音に正變あるは、その聲音純粹のなると混雜なることによることにて、純粹なるは常に直くして清み、混雜なるは常に曲りて濁れり、されば曲りて濁りたらむ音聲には、その言語も亦まがりて濁り、直くして清みたらむ聲音には、その言語も亦直くして清むものなり、我が國の言語の直くしてすめるは、やがて聲音の直くして清めるによることはいふまでもなければ、千早振神世よりして、君臣の義上下の分定りて、天地日月とかはることなく落つることなく、他國人の入り來ることもなかりしかば、聲音も言語も、神世のまゝに直く正しくして濁り曲ることはなかりけむ、然るに、中世このかた、支那とゆきかひしてよりは、聲音言語もやゝゝにみだりかはしくなりて、濁音半濁音などいふものさへ出て來にたるは、やがて、我が正音正語に、彼れの不正音不正語のまじこりたるによるものなり、されば、西洋諸國の聲音のたゞしからざる又言語のよこなまれるは、や

がて、其の國々の兇暴無殘にして、君臣の義上下の分などは嘗て知るものなく、弱の肉をもて強の食とする習によれること知るべし、今そのゆゑよしを明さむかため、末松謙澄氏の歐文沿革考の中なる、英吉利の部を抜きいで、左にしるす、

上略羅馬人征入の前、英國の土言は、歐洲言語三大種族の一なる土言にて、ケルチック語なりしが、羅馬人之を征服するに及び、各所に兵營を置き、大道を開て國內の行通を便にし、鎮將を發して政令を行ひ、羅馬市街を造り、遂には天子自ら蹕を移せし者あるに至る、斯の如きと四百年に内外す、此時に方り、英國には羅馬語と土言との二種ありしと知るべし、勿論、蘇格蘭及愛爾蘭の土言は、英國内地の土言とは幾分の差あれども、同くケルチック語種族に屬す、羅馬兵權の衰ふるに及び、日耳曼北部の人民亂入を四方に始め、英國には、エルフ河畔より、サキソン人、アングル人、ジュート人など續々として、諸方の海岸に攻入たり、時に羅馬人は、既に擧て其の本國に歸り、土人は戦ひて死するあり、捕へられて殺さるゝもあり、深山幽谷に潜逃するもあり、其儘に残りたるは、悉く奴隸とせられ、婦女子には、攻侵入の妻となりしもあるべけれども、素より、其の土言を保持する勢力なく、遂に英國の

言語は攻侵者輸入の言語に化し、羅匈并に從來の土言は殆ど其の蹤迹を内地に留めざるに至れり、其の狀恰も我が日本が蝦夷人種を攻伐し、我が古言を輸入せしと同じと思はる、今の英語の本宗は、即ち此の攻侵人輸入の語なり、其の首としてアングロ人サクソン人の輸入に係るが故に、或は之をアングロサクソン語と稱す、勿論、均しくエルブ河畔の土言に出たる者とはいへども、輸入の種族の異なれば、地方轉訛は幾分の差異ありしと知るべし、併し兎に角に文字もありて書を作る術を知れり、其の用ゐる所の文字は、日耳曼の古字體に似たるもあり、羅匈字に似たるもあり、故に學者の説にも、日耳曼より持來りたる者なりといふもあり、從來の土人が、已に羅馬字を折衷して作り居たるを取りたるなりといふもあり、又此の二體を合して、新に作りたる者ならむといふもありといへども、確證の徵すべきなければ、姑く之れを含くも、アングロサクソン語の英國に行れしこと、六百年の久きなれば、其間漸次に其體裁を成せしは疑ふべからざる事實とす、殊にアルフレッド王は、幼少にして二たび羅馬に遊びしこともありて、夙に文學の要を悟り、自ら率先して新書をも著し、羅馬書をも翻譯し、已に粲然見るべき文章あ

りしこと、其の遺物を見て明なり、然るに此頃よりして、已にデーン人種、即ち今の丁抹諾威邊海岸の人民英國に攻入し、遂に王統もデーン人を奉ずるに至れり、デーン人の言語は、アングロサクソン語と其種族を同すといへども、發音其他悉皆同一の者といふべからざれば、在來の英語に幾分の變動を與へしこと知るべし、已にして能爾曼人の攻入に遇ひ、世は全く變じて封建制度となり、言語も古來未曾有の大變化を生じたり、其の故は國王は能爾曼人なれば、宮中の言語は固より能爾曼出の佛語たるのみならず、國中各處に封せられたる諸侯并に附屬の武人は、孰れも能爾曼人なれば、是亦佛語を用ゐ、遂に裁判所の言語まで佛語の外は用ゐざらしむるに至れり、而して、在來の英人を問へば、征服せられたりとは雖ども、以前、土人が日耳曼人に其の大半を殺されたる時と違ひ、人口も多く且急に外國語を學び得る者にあらざれば、依然として在來の英語を用う、詞を換て之を言へば英國は、此時に至り再び二種の言語を國內に出せしこと、最初羅馬人攻入の時と同じ、勿論、能爾曼人の攻入は、羅馬人の攻入と其趣は變はり、何事によらず、上下の交通は幾層の接近を加へたれば、時日を経るに隨ひ、能爾曼人は、幾分か英語を

覺え、英人は幾分か佛語を覺え、其發音も、英人が日耳曼より持來りたる北方の堅音は能爾曼人が持來たる南方の輕音に化せられ、能爾曼人の南音も、幾分か英人の北音に化せられ、云はゞ、雙方歩み合の如き姿に赴きたりといへども、猶充分の混化に至らず、故に此の時代の著書は、上等士流の爲にする者は佛語を用ゐ、一般人民の爲にする者は、英語を用ゐたれども、其れさへ、兩語とも未だ完全ならず、殊に英語は、已にアルフレッド王時代の盛時を失ひたれば、其の艱難想ひ知るべし、且又、學者の重に研究する所は、羅馬書にして、法律や教法の思想を表出する熟語は、已に羅馬語に備はれるを以て、此等の著書は、一般に羅馬語を用ゐたり、之を日本に譬へば、支那文字の流行せしより、記する所の事柄を目的とする所の讀者、その書により、漢語交の和文と假名文と、又不出來ながらも、純粹の漢文にならひたる者と、同時に行れしと、髣髴たり、英國の文字世界は、かゝる紛雜の有様なりしかば、當時の人の思想にては、之を調和して一の好文章を得むこと、殆どいふべくして行ふべからずとすること、猶今の日本人中に、日本文章改革の成功を危むと同じき人も多かりしならむ、然るも當時英國の操觚者は、中々に僻易せず、文壇の豪

傑も前後に顯はれ、エリサベス女王の代に及んでは、英國の文物勃然として起り、英國文章黃金時代の稱を得るに至れり、此の偉功を奏せし第一の文豪は、チヨース其の人即ち是なり、此人生れて才幹あり、國事の功勞も少からず、英國文章の衰微を歎じ、カンテルブリー巡禮談を作る、中略チヨースの此の書を作るや大に思ふ所ありて、當時に並び行れたる佛語英語を混化して、其粹を選び之を行るに妙文を以てし、遂に今體英文の基礎を一定す、その後は、此の體裁を用ゐるもの追々に起り、綴字法の如きは、言語發音の變遷に因て之を改め、學術上の熟字の如きは、巧に羅馬語を採用して英語となし、有力の著述家相續て輩出し、遂に前にいふエリサベスの盛代を來たすに至りたるなり、此の時代より後と雖も、諸學者の勉強により、英語の進歩せしは論を待ざれども、之を建築にたとふれば、九仞の大功は已にエリサベス時代に至るまでに竣功したりといふべし、下略

以上のごとく、英國の言語文章は、羅馬人の征入によりて一變し、サキソン、アングル、ジュウト人などの侵入するに至りて再變し、英國の王統デエン人に歸するに及びて三變し、能耳曼人の攻入に依り、能耳曼語と英語と交用するに至りて四變し、チヨ

イサの英佛の語を混化して、今體英文の基を開くに及びて五變せり、かく世の戰亂により興亡に従ひて、種々の聲音言語入り來り入りまじりて、直きものもよこなまり、^{ゆる}ゆるものもうち濁りて亂れにみだれ、變はりにかはりたるものなれば、その聲音言語のよしあし知るには、何を以て標準とせむ、されば、今英語の原語とするものは、其のむかし、アングロよりうつりしものにや、サキソンよりまぎれしものにや、又デエンにや、能耳曼にや、一々を識別せむこと、げに難きわざなるべし、西洋諸國亦皆之と同じ、然るに、我が國の言語は、古へにくらべてはかはりにかはりたること、猶英國の如くなるべけれども、外國人の侵入にあひて、王統のかはるなどいふ忌はしくみだりがはしき事はたえてなきからに、聲音はみだれ、言語はかはると雖ども、そはたゞ、原音のまがり、原語のよこなまりたるに過ぎず、是を以て、猶古の原音原語の性質を具へて、盡く我が國ぶりならざるはなし、此支那の言語は、此の限りに非ず、されば、記紀二典及び祝詞宣命等の古書を以て、今の正しからざる言語と照らし合せて、この聲音はいかにしてか移るへる、かの言語は何處よりか出てたると、深く考へ遠くおもひはかりなば、その正變雅俗、鏡にかけて見たらむ如く明かにわきまへ得べくなむ、

第三節 菅了法氏の日本語の説を難す

我が國の言語の精微にして、西洋諸國に冠絶せるよしは、前にいへるにて知るべし、然るに、菅了法氏が國民の教育といふ書に、日本語と題して論はれたるを見るに、凡て僻言ヒカゴトのみ多くて中々に世の惑ひともなりなむことをおそれ、己今其説を抜き出で、一、二論はむとす、其の略にいはいはく、

世に稱す、英語の数は十七萬に下らずと、獨逸佛國の言語も亦多く之に劣らざるべく、以て其豊富なるを知るべし、我が國の言語は、いまだ其の數を聞かずといへども、其の果して貧乏なるや明かなり、洋學者が、洋語を翻譯して大に國語の不足を歎するは、明白に其の一證なり、且、在來の言語にても、其の換言の寡きを見るべし、譬へば、みるの一語にても、英語には「See」、「Look」、「Perceive」、「Observe」、「Behold」等の五六様に言ひわくれども、邦語にては、みる、ながむるの二様にとゞまり、にはひ、かをりの語にても、英語には「Smell」、「Scent」、「Fragrance」、「Perfume」、「Odour」の五様に陳ることを得べし、此の他、事物の彼に備りて我に缺くもの、其の幾萬なるを知らず、皆邦語になきところなり、以て日本語の貧乏なるを推知すべし、愧づべきの至りなり、

多きやうなれども、諸外國の語もくは、りての事なれば己レはさまで誇るべきわざならじとぞおもふ、又、洋學者が洋語を翻譯して、國語の不足を歎するはといはれたるは、我が雅言の事にはあらで俗語のことなるべし、若シ雅言の事を指して、たゞに國語といはれたるものならむには、己レはその國語の不足よりも、國語を知るもの、不足を歎するなり、そは、今の世にして、我が國語をことく心得たらむには、「三」はくろがねのみちと翻譯して、漢語の鐵道は要せざるべく、「テレグラフィ」ははりがねたよりと翻譯して、漢語の電信は要せざるべし、此の例を以て推すときは、いかなる洋語といへども、我が雅言と俗語とを、斟酌したらむには、それを翻譯しがたき事やはあるされども、今の世の人はさらなり、洋語を翻譯するものすら、我が雅言をしれるはまれにて、悉く俗語又は漢語を用ゐむとするを以て、さては、國語の不足を覺ゆるぞかし、英語の數多きに比ては、固より不足なるべけれども、我が國語は變通自在にて一言も百言になり、百言も千言になるものなれば、それを活用して、いろく「一」にしたらむには、しかのみ歎くべき事かは、さて又我が國のみる、ながむ、にはふかをる、などの語を、英語にては五六様にいひ分くとて、其の例を舉げて示されたれど、是レ亦いみじ

と字書に見えたれど、漢語に當てたらむには、先^ツ「視」の義に近かるべく「Observe」「Behold」

四〇三

はずとも其の例格に合せ見たらむには、自づから悟り得べし、さて我が國語は、たゞ「見」の一語にても將然に九様、既然に十三様、方然に三十様、已然に三様とやうに、凡て五十五様にも活用けり、英語も活用くといへども、大方は三四様に過ぎず、されば語の數も自から多かりけむ、此の例にて知るべし了法氏にはかゝることをも辨へられざるにや、口をしき事なり、氏又曰く、

又日本語の不規則なるは、最も以て甚しきことにて、今此の篇に述るを得ざれども、名詞動詞に單複の差別なく、例へば「馬が來た、牛が來た、人が死んだ」といふが如き、一匹の馬にや、數頭の牛にや、一人が死したるにや、多人數死したるにや、甚だ以て漠然たり、代名詞に男女性の區別なく、「其お方は婚禮なされました」彼方に頼んだ、此方に貰つた」といふが如き、女子にや、男子にや、知るべからず、又過去現在未來の時に全く區別なきには非ざれども、常に其規則を破て怪します、譬へば、未來の格にて「明日は屹と參ります」今宵は雨がふります、貴方には最一度お目にかゝりますから云々、すべて現在の格を用う云々、

我が國の名詞動詞には單複の差別なしと、そは英語の如く文字の形の上にこそな

けれ、語尾に詞を添へて單複を示せり、たとへば君たち。汝ら。己どもなどのたち。ら。ども等にて複といふことを知るべく、君ひとり。汝のみなどのひとり。のみ等にて單といふことを知るべし、但し、たち。ら。ども。のみは名詞動詞ともに用ゐるされば、我が國語は單複の數なしと強にもいひがたくや、又男女の性のことは、元より、言痛くいふには及ばぬことなり、そは男はいかにしても男なるべく、女は如何にしても女なるべければなり、さるを英語にては、凡て剛強のものを男性とし、柔和のものを女性と定めて、無情のものにまれ、非常の物にまれ、皆ことごとくに男女の性を分くるは、あまりに委はしきに過て、中々に諛言なるをいか、せむ、そは猫には男も女もあるものを、なべて柔和のものとして、男をも女性とし、犬も男女はあるものを、なべて剛強のものとして、女をも男性とし、かくて、山川草木金銀玉石などに至るまで、皆その性を分たざるは、なく、但し男女いづれとも定め難き天然の男女ありとも、そを種々に取りかへて、男をも女性とし、女をも男性とするなど、いみじき諛言といふべし、但し英語に姉妹のことを Sister といひ、兄弟のことを Brother といふが如き、男女の性の差別は、我が國語にもあることにて、兄弟を アニ、ヲト といひ、姉妹を アテ、イモ といへり、其の他叔父を アンク、叔

母を Aunt といふが如きも「オヂ、オバ」といふ國語あるに非ずや、或人の説に、我が國の性々出身の「手」響田和氣の「氣」などの「キ、ク、コ」是なり、女性は、未行を用ゐる、譬へば、伊非那、破日、伊非那、見えた「美」大鐵賣の「實」伊毛（妹）の「毛」合せざるものなり、されば古へより男女の性も五、十、音中に就ての事にやとていへば、あらざる理りもあらむが、されども、こは只人のされば、我が國語は、男女の性なしと強ちにもいひがたくや、又馬が來た牛が來た、人が死んだ」と今の俗にいふがごときは、漢文の格より轉りたる俗言なり、漢文には、單複の別全くなきには非ざれども、そを別けずして、たゞに馬來牛來人死とやうに記すが常なればなり、我が國の古言は然らず、單數ならば、だゞに馬來る牛來ると書くともあるべけれど、若し複數ならむには、必馬ども來る、牛ども來ると書くべき格なり、よしやどもといふ複數の辭を添へずとも、數字を以て、ひとつ、ふたつと、いふ語を、馬又牛の下に加ふれば、其の義明かなり、殊さらに、此は複數の字なり、彼は單數の字なり、と、一ッに作り出るには及ばぬことなり、但し英語の單複の數を分つとらば、我が國語又明日は屹と參ります、今宵は雨かふります、貴方には最一度お目にかゝりますか、云々すへて現在の格を用うといはれたるは、げにさる事ながら、心あるものは然

いはすて「明日は屹と参りませう」「今宵は雨がふりませう」「貴方には最一度お目にか
かりませうから云々」といふべし、よし然らずとも今のみだりがはしき俗語をもて
たゞに日本語は不規則なりなど、は深くもおもはぬ妄言に似たり、さて以上論ひ
しが如く、我が國語にも、單複の數あり、男女の性あり、過去現在未來の別あり、殊に活
用語の多きに至りては英語の三四様にいひ分くる類にあらず、獨逸佛蘭西等の語
精微なりといへども、いかでか我が國語の奇しく妙なるには及ばむ、抑西洋諸國に
文典といふものありて、各その言語を正すめるは、やがて其の國々の戰亂興亡に依
りて、いろ／＼の言語入りまじりて、溷雜不正なる様を知るべし、さて、かく溷雜不正
になりて、遂には其の國の原語をも失はむことを恐て、當時の操觚者流は、力を極め
て己がむき／＼機軸を出ださむと欲し、さては、男女の性さへかにかくに附會して、
何がしの文典は委しく、くれがしの文典はおろそかなりなど、世に譽もし毀りもす
めり、言語の亂れたる世には、已むを得ぬことにて、我が國も亦かゝる有様にならむ
とす、了法氏は教育に熱心なる人と聞く、されば、是れ等の道には別けて盡すべき人
なり、いたづらに、彼を譽め我を毀りて、西洋に心醉せる白面書生と肩をならべて論

すべき時ならめや、

第二十七 語學の系統

落合直澄

今日は、我國語學の開け來ました順序、語學の分派したる次第を申し上げますつもりであります、我語學の追々進歩しました間は、凡千二百年で、其間大變化三つであります、

古事記、日本紀撰定の時より、延喜朝あたりまでを第一期とし

延喜の朝より、元祿の頃までを第二期とし、

元祿より此方、慶應までを第三期とし、明治の今日が第四期であります、

次に語學に就て種々なる説の起りまして、其分派しましたる其の大略を申し上げます、之を分てば大略三派であります、

言語を古へより使用したる例證等を挙げ、之に加るに、通略延約等を以て之れを解釋し、假字遣等に至るまで訂正を加へたるが第一派であります、

僧契沖、加茂眞淵、本居宣長等の諸大人の專はらにする説であります、

語格と云ひて、古へより使用する例を以て考證とし、活語、體言の連續より係結等に至るまで、其言語の規則を主張するが第二派であります、

是れは、有賀長伯、富士谷成章、本居春庭等の諸大人の專らとする所であります、五十音に備はりたる微妙なる理を説明し、一音毎の形狀より言語の本義を解釋する派があります、

鈴木朗、井面守訓、橘守部、富樫廣陰等の諸大人の專ら主張せられたる所であります、

細かに數へ行かは數種に分れませうが、大畧は此三つに分れませうと思ひます、さて第一期には古事記、日本紀、出雲風土記、古語拾遺、養老の日本紀私記、弘仁の私記、承相私記、元慶の私記など、云ふ書があります、

此第一の古事記、日本紀、古語拾遺の撰者等は、固より漢學には長じたる人等なれども、御國の言語等のことはさまで委しき考は無かつたものかと思はれます、然れども、古へより傳へたる言語の解釋ありたることは、古語に漢字を當て古語を漢文に引き直したるにて分つて居ります、アメノミナカヌシノカミに天御中主神の字を